



父の葬儀に際して

今月3日、私の父が老衰で亡くなりました。満85歳、
寝ている最中に逝ったようでとても穏やかな最期でした。
故人の意向もあり、親戚だけでおくらせていただきました。

さて今回、喪主として葬儀にかかわった中で、知ったこと・考えたことを書きます。

1. エンバーミング

遺体を美しく保つための選択肢。昔から湯灌という死化粧は行われていたが、こちらは血液と防腐剤を入れ替えて、長期保存も可能にする技術である。今回、葬儀のオプションとしてお願いした。亡くなったその夜にエンバーミング施設に送られ、通夜のある翌日のお昼に戻ってくる。施設に送られる前、「生の遺体」とお別れをした。このとき、もう本当に生き返る可能性が完全に無くなるのだな、と思っただら目が潤んだ。本当に寝ているだけのように見える状態だったので、この期に及んでようやく父の死を実感したのかもしれない。

2. お骨拾い

二日目は親戚が集まり、お通夜。三日目に告別式。そして火葬場へ。生まれてはじめて霊柩車に乗った。霊柩車はホイールベースが異常に長く、とても運転が難しいのだそうだ。

さて、火葬すること約2時間、焼き上がったお骨は思いの外、形が残っている。昭和一桁にしては体の大きい人だったので、どう考えても骨壺に収まるとは思えない。どうするのかと思って聞いてみたら、上から押してつぶしながら納めていくとのこと。不謹慎ではあるが理科の教員としての興味から私も押させてもらった。骨は硬いが軽い。これは内部に小さな空洞が多くあるからだ。さらに焼くことで骨自身もろくなっているので、なるほど、力を加えると押しつぶされていく。しかしそれでも1/3ほどは入りきらず。これもどうするのか、と聞いてみたら「土に撒かせるいただきます」とのこと。え？どこの土地に？火葬場での対応は、それまで厳かでしめやかだったイベントの幕切れとしては、意外なほどざっくりとしたものであった。

3. お葬式とは

仏教におけるお葬式は、故人をしのび、改めて生について考える場面とされている。たしかに、改めて父がどのような人間であったかを考えてみると（司会の方のアナウンスの都合や戒名の件で何度も聞かれる）、自分の中に父の面影があることに気づく。体つきや表情だけでなく、ものの考え方や嗜好が似ていることが多いのだ。逆に叔父・叔母が集まった場では、異なった視線からの父の新たな一面を知ることができた。お葬式は時間と金がかかって、煩わしいだけかと思っていたが、一人の人間の生から死へのつながり、その区切りとしての行事として、悪くないものだったと思った。

さいごに 喪中について…

父の親戚・縁者には、亡くなったことを知らせる意味で母の名で年賀欠礼状を出しました。ただ私は慣習としての「喪」は受け入れません。父が亡くなったことは悲しいことですが、それで私や私の家族が穢れているとは思えませんし、遠慮していただくことは何ともありません。大事なものは残されている我々が真摯に生きることです。科学的な思考が未発達だった平安時代に決められた慣習、そんなものに縛られることなく生きようと思います。きっと父もそう考えるはずだと思うのです。